

樹木画に表れたレジリエンスの特徴

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-09-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高橋, 依子, 藤竹, 智代 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4592

樹木画に表れたレジリエンスの特徴

高橋 依子 ・ 藤竹 智代

臨床心理学専攻教授
カウンセリングセンター相談員

臨床心理学専攻2回生

要約

本研究では、無意識の自己像を表すと考えられている樹木画に、レジリエンスがどのような特徴として表現される傾向があるのかを調査することにより、樹木画テストでレジリエンスを測定することが有効なのか検討することを目的とした。そのため井隼・中村(2008)の「Resilience4 側面尺度」の短縮版を作成し、129名に作成した短縮版の Resilience4 側面尺度と樹木画テストを実施した。樹木画テストの描画特徴を21の評定項目に分類し、Resilience4 側面尺度の4下位尺度それぞれの高群と低群に描画特徴の差はみられるのか、また4下位尺度それぞれの下位因子と描画特徴との間に関連がみられるのかを調べるために、 χ^2 検定と一要因の分散分析を実施したところ多くの有意差あるいは有意な関連がみられた。特に樹冠の形状や種類、葉の有無、樹皮の項目において、多くの Resilience4 側面尺度の下位尺度や下位因子との関連がみられた。よって、樹木画テストにもレジリエンスの特徴が表れることが明らかとなり、葉の有無や葉と木の関係、樹皮の描画特徴がレジリエンスを予測する可能性があることが考えられた。

キーワード：レジリエンス、樹木画テスト、Resilience4 側面尺度、短縮版

問題と目的

Selye(1956/1988)によるストレスの研究以後、問題解決のために行なう様々な認知的・行動的方略であるストレスコーピング、個人内の要因に主眼を置いたストレスへの頑健性であるストレス耐性やハーディネス性格特性など、ストレスに関する様々な概念が明らかとなってきている。それらの働きのひとつとして、近年ストレスサーからの影響の緩衝要因となり、不適応状態からの回復をもたらす働きが期待できるレジリエンスという概念に注目が集まっている。

レジリエンス研究の始まりは、一部の統合失調症患者が他の患者に比べて適応的なライフコースを辿る現象に注目したものだと言われている(Luthar et al., 2000)。レジリエンス研究は、前述のようなリスク要因を持つ人の一部が適応的なライフコースを辿る現象に焦点を当てた研究か

ら、レジリエンスをプロセスとして理解し、リスクとなる因子と保護因子の関連を解明することを目的とする研究へと移行していき、さらには健康な個人がより健康になるために備えることが望まれる特性という観点での研究も行われるようになっていった(村木, 2015)。小花和(2002)は、レジリエンスの特性と考えられるものには、従来の心理的ストレス研究においても媒介要因とされてきたものが多いが、レジリエンスの概念では、それらの媒介要因のストレス過程での単独の影響を検討するのではなく、各要因間の関連が重視されており、個人内要因と環境要因の相互作用にも着目されていると述べている。このように、レジリエンスは個人の性格特性だけに焦点が当てられている概念ではなく、どのような環境資源が利用可能な状態であるのかといったことや、環境資源を利用できるスキルが個人にどの程度あるのかと

いったことも含めて、包括的に捉えられる概念である。

現在レジリエンスを測定する尺度がいくつか開発されているが、質問紙による心理測定尺度が中心である。質問紙法は妥当性と信頼性が高く、かつ施行が容易で、解釈も施行者の技量に左右されないため、客観的なデータが得られる方法である。しかし、質問紙によるパーソナリティのアセスメントは、回答に虚偽や社会的望ましさが装われる可能性があることや、対象者の読解力や自己洞察力に依存しているため、回答と実際に差異が生じる可能性があることなどの短所がある。そこで、投映法が用いられるようになったが、未だ数はきわめて少ない。

これまでのレジリエンス研究によって、レジリエンスのさまざまな要素が明らかになってきているが、レジリエンスが多くの要素を含む包括的な概念であるからこそ、未だに定義が統一されておらず、研究者によってとらえ方が異なるのが現状である。村木(2015)は、レジリエンスのとらえ方について、特性としてのとらえ方と、状態としてのとらえ方の2つに分類出来るとし、特性としてのレジリエンスの定義には、「安定的な(心理的)平衡を保てる能力」(Bonanno, 2004)や、「ストレスのネガティブな効果を緩和するパーソナリティ特性」(Wagnild, 1993)等が該当すると述べている。また村木(2015)は、特性としてのレジリエンスを研究対象とすることで、困難な出来事に対処する上での適応的な個人内の資源を明らかにすることが出来ると述べる一方、個人特性としてのレジリエンスのみを扱う研究では、比較的安定的な個人特性の部分のみに着目してしまうので、レジリエンスの発達やその介入可能性について論じることが難しいことや、困難な状況からの適応という過程を含むレジリエンスという概念を正確に理解できない可能性を指摘している。そのため、研究上の工夫として、環境要因との関連も考慮に入れ、力動的なプロセスの視点を持ち込むことがレジリエンスの正確な理解においては必要であるという声が上がっている(村木, 2015)。

そこで本研究では、樹木画テストを用いて、描画特徴とレジリエンスとの関連を検討することを目的とする。レジリエンスは、Wagnild(1993)に基づき、「ストレスの負の効果を和らげ、適応を促進させる個人の特性」(Wagnild, 1993)と、個人内の特性として定義する。その上で個人内特性と環境要因との関連も検討できるように、環境要因にも焦点を当て、環境資源を測定する項目が多く入れられている「Resilience 4 側面尺度(井俣・中村, 2008)」を、レジリエンスを測定する尺度として用いる。Resilience 4 側面尺度は、それまでは結び付けて考えられていた、持っている資質の「認知」と、それを上手く「活用」することを分けて捉え、レジリエンスを個人内資源の認知と活用、環境資源の認知と活用の4つの側面から測定するために作成された尺度である。また、投映法の一つである樹木画テストを用いて、レジリエンスと樹木画における描画表現との関連を調査する。無意識の自己像を表すと考えられている樹木画に、レジリエンスがどのような特徴として表現される傾向があるのかを調査することにより、樹木画テストでレジリエンスを測定することが有効なのか検討したい。

予備調査

レジリエンスを測定する尺度として使用するResilience 4 側面尺度(井俣・中村, 2008)の原版が99項目と項目数が多く、樹木画テストと共に実施するには対象者の負担が大きいと判断し、Resilience 4 側面尺度(井俣・中村, 2008)の短縮版を作成することを目的として予備調査を行った。

調査対象

大学生177名を対象に、質問紙調査を小集団に分けて実施した。その内、不備のあったもの41名を除く、136名を分析対象とした。分析対象者はすべて女性で、平均年齢は19.3歳(標準偏差1.22)であった。

方法

質問紙を対象者に配布し、教示を行う前に、調

査への参加は完全に任意であり、回答しなかった場合にも不利益は一切生じないこと、調査は無記名で行い、結果は研究の目的以外では使用しないことを文書と口頭で説明をした。その後、質問紙に対する教示を行い、回答を求めた。記入し終わったら手を挙げて知らせよう教示し、記入が終わった質問紙から順に回収した。

結果

それぞれの下位尺度について原版と同じ因子構造であると仮定し、できるだけ少ない項目で、かつ一定の信頼性が得られるような項目群が残ることに配慮しながら、因子分析を繰り返し行った。その結果、個人内資源の認知尺度が 15 項目、個人内資源の活用尺度が 13 項目、環境資源の認知尺度が 12 項目、環境資源の活用尺度が 12 項目の、計 52 項目の短縮版が作成された。また、信頼性を確かめるためにそれぞれの因子の α 係数を算出したところ、個人内資源の認知尺度は、第 1 因子が $\alpha = .829$ 、第 2 因子が $\alpha = .751$ 、第 3 因子が $\alpha = .722$ 、第 4 因子が $\alpha = .705$ であった。個人内資源の活用尺度は、第 1 因子が $\alpha = .798$ 、第 2 因子が $\alpha = .797$ 、第 3 因子が $\alpha = .772$ 、第 4 因子が $\alpha = .738$ であった。環境資源の認知尺度は、第 1 因子が $\alpha = .887$ 、第 2 因子が $\alpha = .858$ 、第 3 因子が $\alpha = .823$ であった。環境資源の活用尺度は、第 1 因子が $\alpha = .953$ 、第 2 因子が $\alpha = .920$ 、第 3 因子が $\alpha = .835$ であった。十分な値が得られ、Resilience 4 側面尺度の短縮版の信頼性が確認された。

本調査

筆者が作成した短縮版の Resilience4 側面尺度と、樹木画テストを実施し、無意識の自己像を表すことが多いと考えられている樹木画に表現されるレジリエンスの特徴を検討することを目的とした。

調査対象

大学生 189 名を対象に、樹木画テスト、質問紙調査を小集団に分けて実施した。その内、質問紙や描画後の質問用紙に不備のあったもの 60 名

を除く、129 名を分析対象とした。分析対象者は男性 13 名、女性 116 名で、平均年齢は 19.5 歳（標準偏差 1.05）であった。

方法

樹木画テスト

A4 のケント紙 1 枚と HB の鉛筆 1 本、描画後の質問用紙を用意した。また、描画後の質問については、高橋・高橋 (2010) が描画後の質問として挙げている項目を参考にし、①何の木か、②どのような状態の木か、③何年ぐらいいたっている木か、④どこに生えている木か、⑤ 1 本だけ生えている木か。たくさん生えている木の中の 1 本か、⑥ (実を描いた人に) 何の実か。実はどういった状態か、⑦木に対して感じたり思ったりしたことについて自由に記述の 7 問を、A4 用紙に自由記述で回答を求めた。

質問紙

本調査では、筆者が作成した Resilience 4 側面尺度 (井俣・中村, 2008) の短縮版を使用した。「個人内資源の認知」と「環境資源の認知」ではいずれも、「まったく当てはまらない」「あまり当てはまらない」「どちらとも言えない」「やや当てはまる」「非常に当てはまる」の 5 件法で回答を求め、それぞれ 1～5 の得点を与えた。「個人内資源の活用」と「環境資源の活用」ではいずれも、「まったく行わない」「あまり行わない」「どちらとも言えない」「よく行う」「とてもよく行う」の 5 件法で回答を求め、それぞれ 1～5 の得点を与えた。

手続き

本調査でも予備調査同様、調査の前に、調査への参加は任意であることと、結果は研究の目的以外では使用しないことを説明した。

A4 のケント紙 1 枚と HB の鉛筆 1 本、樹木画テスト後の実施手順が書かれた A4 の用紙と描画後の質問用紙とレジリエンスに関する質問紙を入れた封筒を対象者に配布し、今から絵を描いてもらうことを伝え、描画を終えるまで封筒は開けないように指示した。ケント紙と鉛筆と封筒が行き渡ったところで、「それでは、木を 1 本描いてください」と教示をし、消しゴムの使用は制限しな

かった。描画を終えた者から封筒を開けて描画後の質問用紙とレジリエンスに関する質問紙に取り組むように求めた。全ての実施を終えた対象者には、封筒の中に終えたもの全てを入れるように教示し、封筒に入れられたところで回収を行った。

結果

描画特徴の分類

①用紙の向き、②木のサイズ、③木の左右の位置、④木の上下の位置、⑤木の上部や側部の切断の有無、⑥木の状態、⑦樹冠の種類、⑧樹冠の形状、⑨枝の構造、⑩枝の先端処理、⑪幹の長さ、⑫幹の幅、⑬幹の先端処理、⑭樹皮の描写、⑮根の有無、⑯地面の構成、⑰根元の修飾の有無、⑱実の有無、⑲実の状態、⑳付加物の有無、㉑1本だけ生えている木か複数の木の中の1本かの21項目を評定項目として設定した。②木のサイズ、③木の左右の位置、④木の上下の位置、⑪幹の長さ、⑫幹の幅の分類の基準は以下に記す。②木のサイズは、高橋・高橋(2010)を参考に、用紙の三分の一から五分の四ぐらいのものを【普通】、これ以上の大きさの樹木画を【大】、これ以下の樹木画を【小】に分類をした。③木の左右の位置では、幹の中央が用紙の中央よりも1cm以上左側に寄っている木は【左】に、1cm以上右側に寄っている木は【右】に、それ以外を【中央】に分類した。また④木の上下の位置では、用紙の上の辺から木の上部への距離と、用紙の下の辺から木の下部への距離を測定し、その差が1cm以内であれば【中央】に、用紙の上の辺と木の上部の距離の方が1cm以上短ければ【上】に、用紙の下の辺と木の下部の距離の方が1cm以上短ければ【下】に分類した。さらに⑪幹の長さ⑫幹の幅では、すべての木の絵の幹の長さ⑫幅を測定して中央値を算出し、中央値よりも短い幹を【短い】、長い木を【長い】、幅が広い幹を【広い】、幅が狭い幹を【狭い】へと分類した。その各描画特徴の出現人数と出現率を表1に示した。

表1 各評定項目の出現人数と出現率

		人数	%	
形式	①用紙の向き	1. 縦	103	79.8
		2. 横	26	25.2
	合計		129	
	②木のサイズ	1. 大	29	22.5
		2. 普通	62	48.1
		3. 小	38	29.5
		合計		129
	③木の左右の位置	1. 左	44	34.1
		2. 中央	73	56.6
		3. 右	12	9.3
		合計		129
	④木の上下の位置	1. 上	57	44.2
2. 中央		43	33.3	
3. 下		29	22.5	
合計		129		
⑤木の上部や側部の切断の有無	1. 有	18	14.0	
	2. 無	111	86.0	
	合計		129	
樹冠	⑥木の状態	1. 茂っている	122	94.6
		2. 茂っていない	7	5.4
		合計		129
	⑦樹冠の種類	1. 雲形	120	93.0
		2. 枝のみ	5	3.9
		3. その他	4	3.1
	合計		129	
	⑧樹冠の形状	1. 円	56	43.4
		2. 横長	43	33.3
		3. 縦長	12	9.3
		4. その他	18	14.0
	合計		129	
枝	⑨枝の構造	1. 二次元	57	44.2
		2. 単線	11	8.5
		3. 無	61	47.3
	合計		129	
	⑩枝の先端処理	1. 閉鎖	45	34.9
		2. 開放	12	9.3
3. 単線		11	8.5	
4. 無		61	47.3	
合計		129		
幹	⑪幹の長さ	1. 短い	65	50.4
		2. 長い	64	49.6
		合計		129
	⑫幹の幅	1. 狭い	67	51.9
		2. 広い	62	48.1
		合計		129
	⑬幹の先端処理	1. 閉鎖	41	31.8
		2. 半開放	25	19.4
		3. 開放	63	48.8
		合計		129
	⑭樹皮の描写	1. 空白	66	51.2
		2. 線	40	31.0
3. その他		23	17.8	
合計		129		
根元	⑮根の有無	1. 有	44	34.1
		2. 無	72	55.8
		3. 示唆	13	10.1
		合計		129
	⑯地面の構成	1. ライン	32	24.8
		2. ライン以外の描写	2	1.6
		3. 無	95	73.6
	合計		129	
	⑰根元の修飾の有無	1. 有	5	3.9
		2. 無	124	96.1
		合計		129

実	⑮ 実の有無	1. 無	108	83.7
		2. りんご	16	12.4
		3. 複数	2	1.6
		4. その他	3	2.3
	合計	129		
	⑯ 実の状態	1. 無	107	82.9
2. 熟している		17	13.2	
3. 未熟		4	3.1	
4. その他		1	0.8	
合計	129			
その他	⑰ 付加物の有無	1. 有	3	2.3
		2. 無	126	97.7
	合計	129		
	⑱ 1本か複数か	1. 1本	85	65.9
		2. 複数	44	34.1
		合計	129	

Resilience 4 側面尺度の因子分析の結果

筆者が作成した短縮版の Resilience4 側面尺度の下位尺度それぞれについて因子分析を行った。どの下位尺度においても因子負荷量の低い項目を削って因子分析を繰り返し、以下の表2から表5に示すような結果となった。個人内資源の認知尺度の第4因子の「関心の持続因子」、環境資源の認知尺度の第1因子の「朋輩資源因子」は、本研究で短縮版を作成するに当たって、原版から因子構造や因子に含まれている項目が変わったため、筆者が因子名を命名した。

表2 個人内資源の認知尺度の因子分析結果 (最尤法・プロマックス回転)

	I	II	III	IV
第1因子：社交性因子 (α=.741)				
3. 会話が好きである	1.009	-.062	.094	-.069
8. 人と話すことが好きである	.863	.027	-.118	.042
6. 初対面の人ともすぐに仲良くなれる	.335	-.116	-.007	-.086
第2因子：楽観的思考因子 (α=.781)				
15. 気持ちの切り替えが早い	-.090	.853	-.070	-.034
10. 楽天主である	.093	.694	-.081	-.098
13. なにごとにも前向きである	.081	.678	.146	-.166
第3因子：有能感因子 (α=.662)				
12. さまざまな問題を解決していける能力がある	-.004	-.002	.997	.015
11. 自分自身を頼りにしている	-.031	.232	.515	-.091
4. 物事を論理的に考えることが出来る	-.009	-.131	.423	.091
第4因子：関心の持続因子 (α=.694)				
14. なんにでも真剣に取り組む	.022	-.006	-.067	1.011
5. やるべきことはきちんと最後までやりぬく	-.005	-.100	.282	.483
因子間相関				
I	—	.219	.202	.273
II		—	.562	.235
III			—	.313
IV				—

表3 個人内資源の活用尺度の因子分析結果 (最尤法・プロマックス回転)

	I	II	III
第1因子：熟慮的行動因子 (α=.775)			
3. 一度失敗しても、その次は上手くいくようにしようと工夫する	.721	-.151	-.151
1. 問題やその原因について自分なりに考える	.706	-.200	.051
9. 自分には足りない部分があることを認め、そこを補い奮めていくとする	.695	-.010	.030
6. 困難を克服することは、意味があるとする	.676	-.133	.127
4. 問題の中により部分はないのか考える	.467	.198	-.043
第2因子：楽観的行動因子 (α=.751)			
5. 問題についてじっくり考えず、割り切る	-.145	.720	-.046
12. 嫌なことはすぐに忘れてしまう	.070	.707	.029
8. どうにかならなうと聞き直る	-.104	.655	.123
7. 否定された面とは違う自分のいいところ目をつける	.276	.521	.005
第3因子：気づかし行動因子 (α=.763)			
10. 好きなことを行って自己満足している	-.108	-.019	.867
2. 好きなことを行って安心する	.024	.063	.646
13. 好きなことを行い、ストレス発散している	.148	-.065	.608
因子間相関			
I	—	.155	.201
II		—	.268
III			—

表4 環境資源の認知尺度の因子分析結果 (最尤法・プロマックス回転)

	I	II
第1因子：朋輩資源因子 (α=.912)		
6. 自分の話をじっくり聞いてくれる	.871	-.020
3. 自分とは違った考えを与えてくれる仲間・先輩がいる	.845	-.055
2. 困ったことを相談できる友達がいる	.814	.090
8. 自分の能力・価値を認めてくれる友達がいる	.763	.010
12. 自分とは違った考えを与えてくれる友達がいる	.757	.037
5. 手本となる仲間・先輩がいる	.746	-.019
10. なんでも言い合える友達がいる	.730	-.063
9. 同じ目的に向かってがんばっている仲間・先輩がいる	.433	-.209
第2因子：家族資源因子 (α=.910)		
7. 悩みを聞いてくれる家族がいる	-.014	.946
4. 困ったときに助けてくれる家族がいる	-.007	.926
11. 一緒にさまざまなことを楽しめる家族がいる	-.003	.807
1. 客観的な意見をくれる家族がいる	.027	.729
因子間相関		
I	—	.498
II		—

表5 環境資源の活用尺度の因子分析結果 (最尤法・プロマックス回転)

	I	II	III
第1因子：家族資源の活用因子 (α=.950)			
4. 家族に悩みや意見を聞いてもらっている	.949	-.035	-.017
6. 悩みがあれば、家族にぶつけている	.948	.081	-.102
2. 家族に何でも思うことを話して、聞いてもらっている	.937	-.031	.007
10. 家族(母親、きょうだいなど)にアドバイスを求める	.806	-.039	.128
第2因子：友達資源の活用因子 (α=.920)			
7. 友達にグチや悩みを聞いてもらう	-.016	1.043	-.198
5. 友達に困ったことを話す	.110	.824	-.046
11. 友達に共感してもらう	-.086	.799	.067
9. 友達に助けてもらう	-.028	.678	.274
第3因子：仲間・先輩資源の活用因子 (α=.747)			
1. 仲間・先輩の行動を参考にして解決法を見つけている	-.016	-.155	.750
3. 自分のことを考えてくれる仲間・先輩がいるというだけで、落ち込んでばかりいられないという気分になる	-.028	.031	.619
8. 仲間・先輩と一緒に同じ目標に打ち込む	.012	.150	.616
12. 友達の楽しそうな姿がはげみになっていると感じる	.072	-.139	.511
因子間相関			
I	—	.254	.265
II		—	.648
III			—

Resilience4 側面尺度の各尺度の高低群間の描画特徴の違い

各評定項目の出現頻度について、各下位尺度の尺度得点の高低によって差がみられるのかどうかを検討するために χ^2 検定を実施した。

個人内資源の認知高群は、雲形 ($\chi^2(2) = 5.65, p < .10$) で円形 ($\chi^2(3) = 10.88, p < .05$) の樹冠や空白の幹 ($\chi^2(2) = 7.29, p < .05$) を描くことが多く、一方低群は用紙に収まらない木 ($\chi^2(1) = 5.60, p < .05$) や、葉が茂っていない木 ($\chi^2(1) = 3.38, p < .10$)、形が横長の樹冠もしくは樹冠が無い木 ($\chi^2(3) = 10.88, p < .05$)、ウロや切り傷など樹皮が過度に詳細に描写された木 ($\chi^2(2) = 7.29, p < .05$) を描くことが多かった。

また、個人内資源の活用高群は、縦長の樹冠を描くことが多く ($\chi^2(3) = 6.83, p < .10$)、一方低群は、樹冠を描かなかったり、用紙による切断があって形を判別できない樹冠を描くことが多かった ($\chi^2(3) = 6.83, p < .10$)。

そして、環境資源の認知高群は、未熟な状態の実を描くことが多く、一方低群は、実を描かなかったり、熟した状態の実を描くことが多かった ($\chi^2(2) = 5.44, p < .10$)。

さらに、環境資源の活用高群は、円形や縦長の樹冠を描いたり ($\chi^2(3) = 7.71, p < .10$)、空白の幹や線で表現された樹皮を描いたりすることが多く ($\chi^2(2) = 11.25, p < .01$)、一方低群は、葉が茂っていない木 ($\chi^2(1) = 3.29, p < .10$) や枝のみの樹冠、樹冠が描かれていない木を描くことが多かった ($\chi^2(2) = 5.53, p < .10$)。

個人内資源の認知尺度と環境資源の活用尺度それぞれの高低群間で、有意差や有意傾向が共通してみられた描画特徴は4項目(木の状態、樹冠の種類、樹冠の形状、樹皮の描写)と、多くあった。

Resilience 4 側面尺度の各尺度の因子と描画特徴の関連

樹木画の描画特徴と、Resilience 4 側面尺度の各尺度の因子との関連を検討するために、樹木画の描画特徴を独立変数、Resilience 4 側面尺度の

各尺度の因子を従属変数とし、描画評定項目ごとに一要因の分散分析を行った。結果は、表の横に並ぶ項目(樹木画の描画特徴)を独立変数、表の縦に並ぶ項目(各尺度の下位因子)を従属変数として、以下の表6に示した。

考察

Resilience 4 側面尺度全体と描画特徴の関連について

Resilience4 側面尺度と描画特徴との関連全体を検討すると、個人内資源の認知尺度と環境資源の活用尺度に共通して有意差や有意傾向が出ている描画特徴が多いことが分かった。これらの結果から、自己にストレスからの影響を緩衝する要因となるような特性が内在していることを認知している者は、傷つきや直面した問題を家族や友人などの周囲の人間関係を上手く活用して乗り越えることができると言える。両尺度に共通して関連していたのは⑥木の状態、⑦樹冠の種類、⑧樹冠の形状、⑭樹皮の描写の樹冠に関する評定項目と樹皮の描写の4項目であった。Resilience 4 側面尺度の各尺度の因子と描画特徴との関連を検討するために行った一要因の分散分析の結果でもこの4項目に多くのResilience4 側面尺度の下位因子との関連がみられたことから、葉の有無や葉と木の関係(樹冠の種類や形状)、樹皮の描画特徴にレジリエンスが表現されやすいのではないだろうか。

Resilience 4 側面尺度の各下位尺度の因子と描画特徴との関連

Resilience 4 側面尺度の各下位尺度の因子と関連がみられ、かつ各群間に因子得点の平均の差が認められた描画特徴は、表6に示す通り21項目中17項目であった。

1. 用紙の向きについて

用紙を縦向きにして木を描く者の方が、多くの下位因子において、因子得点が高かった。用紙を横向きにして描かれた樹木画は小さいサイズが多く、さらに用紙に全体が収まらずに用紙の辺によって切断されている木が多かった。自分の能力に自信を持ってないことにより、努力を続けてよい

表6 Resilience4 側面尺度の各尺度の因子と描画特徴の関連

		用紙の向き	木のサイズ	左右の位置	上下の位置	切断の有無		
個人内資源 の認知	社交性因子					有<無↑		
	楽観的思考因子							
	有能感因子	縦>横*	普通>小↑					
	関心の持続因子	縦>横↑		左>右*/中央>右*		有<無↑		
個人内資源 の活用	熱慮的行動因子							
	楽観的行動因子							
	気づらし行動因子							
環境資源の 認知	朋輩資源因子				中央>下↑	有<無*		
	家族資源因子	縦>横↑	大<普通**			有<無*		
環境資源の 活用	家族資源の活用因子	縦>横*						
	友達資源の活用因子					有<無↑		
	仲間・先輩資源の活用因子							
		木の状態	樹冠の種類	樹冠の形状	枝の構造	枝の先端処理		
個人内資源 の認知	社交性因子	茂っている>茂っていない*	雲形>枝のみ*/雲形>その他**	円>その他				
	楽観的思考因子	茂っている>茂っていない*		円>その他↑				
	有能感因子		各群間には有意な差や傾向なし					
	関心の持続因子	茂っている>茂っていない↑	雲形>その他*	円>その他↑				
個人内資源 の活用	熱慮的行動因子		雲形>その他*		二次元>単線↑	開放>単線↑		
	楽観的行動因子							
	気づらし行動因子	茂っている>茂っていない*	雲形>枝のみ↑/雲形>その他*	円>その他↑/楕長>その他**/ 縦長>その他**				
環境資源の 認知	朋輩資源因子	茂っている>茂っていない↑		円>その他**/楕長>その他*/ 縦長>その他↑				
	家族資源因子		雲形>その他**/枝のみ>その他**	円>その他**/楕長>その他*/ 縦長>その他↑				
環境資源の 活用	家族資源の活用因子		雲形>その他*/枝のみ>その他*					
	友達資源の活用因子	茂っている>茂っていない**	各群間には有意な差や傾向なし	円>その他**/楕長>その他*/ 縦長>その他**				
	仲間・先輩資源の活用因子	茂っている>茂っていない*	各群間には有意な差や傾向なし	円>その他**/楕長>その他↑/ 縦長>その他*	各群間には有意な差や傾向なし			
		幹の長さ	幹の幅	幹の先端処理	樹皮の描写	根の有無	地面の構成	根元の修飾
個人内資源 の認知	社交性因子							
	楽観的思考因子							
	有能感因子							
	関心の持続因子							
個人内資源 の活用	熱慮的行動因子		狭い>広い↑					有>無
	楽観的行動因子							
	気づらし行動因子					有>示唆↑/ 無>示唆↑		
環境資源の 認知	朋輩資源因子							
	家族資源因子				空白>その他**/線>その他**			
環境資源の 活用	家族資源の活用因子				空白>その他*/線>その他**	各群間には有意な差や傾向なし		有<無*
	友達資源の活用因子				空白>その他↑			
	仲間・先輩資源の活用因子				各群間には有意な差や傾向なし			
		実の有無	実の状態	付加物	1本か複数か			
個人内資源 の認知	社交性因子				1本か複数か			
	楽観的思考因子				1本<複数*			
	有能感因子		無<未熟↑					
	関心の持続因子							
個人内資源 の活用	熱慮的行動因子							
	楽観的行動因子							
	気づらし行動因子							
環境資源の 認知	朋輩資源因子							
	家族資源因子	無>複数*/りんご>複数*						
環境資源の 活用	家族資源の活用因子	無>複数↑/りんご>複数↑						
	友達資源の活用因子				1本<複数↑			
	仲間・先輩資源の活用因子							

(↑:p<.10 *p<.05 **p<.01)

結果を出そうという意欲を持ちづらいことが、有能感を持ってないことや関心が持続しないこととの関連がみられた背景ではないだろうか。また、最も身近な環境である家族からのサポートが乏しいと感じていたり、家族からのサポートを上手く活用できていないことにより、自分が置かれている環境に不満を持っていることが考えられ、環境に合わせて適応しようという意思が持ちづらいことが、全体が用紙に収まらない木として表れている

ことが示唆される。

2. 木のサイズについて

大きくもなく小さくもない「普通のサイズ」の木を描く者が、関心が持続しやすく、家族からのサポートを認知していることが分かった。その背景として、自分の能力に自信が持てず、自分自身の存在を小さく感じたりすることが、自己像を表すことが多いという樹木画に小さいサイズの木として表れていることが示唆される。また「大きい

サイズ」の木は、全体が用紙に収まっていない木の絵が多かったことから、自分が現在身を置いている環境に適応できていないと感じており、環境に不満を持っていたり、回避したい欲求を持っていたりすることが表現されていると考えられる。

3. 木の左右の位置について

用紙の右側に木を描いた者は関心が持続しづらいたことが分かった。用紙の右側が外向性や積極性が象徴される傾向がある（高橋・高橋，2010）ことから、興味や関心の対象が外界にあり、外界からの刺激を積極的に求めることにより、興味や関心を持つ対象が様々に移り変わって、ひとつのことに関心を持ち続けて取り組むことが難しいということが要因である可能性がある。

4. 木の上下の位置について

周囲の人からのサポートを認知している者は、用紙の下辺を地面とみなして用紙の下辺から木が生えているように描く傾向があることが分かった。下辺から木を描く者は、地面を自ら描いて表現するのではなく、用紙の下辺から生えているように表現することで木に安定をもたらしている。自らの拠り所となる枠組みを求めているにもかかわらず、その部分を自ら描くことで表現できずにいるのは、自身が環境資源を有していると認知できていないためではないかと推察される。

5. 木の上部や側部の切断の有無について

用紙による木の切断がない者は切断がみられる者に比べ、多くの下位因子において得点が高かった。また、切断がみられる木は、右側が切断されていることが多かった。木の右側に関する描画特徴は、未来への期待や外向性、自分に自信があることなどと関連が深いように思われる（高橋・高橋，2010）。木の側部が用紙によって切断されている木は、幹の中央で切断されるように描かれており、描画前に木をイメージする段階で木の左側や右側が描かれないことが決まっていると推察する。木の右側の切断には、自身の将来について見通しの持て無さや不安があり、期待や肯定的な感情が持てず、物事に粘り強く取り組んで結果を出そうという意欲を持つことの難しさが表れてい

ることが示唆される。さらに、一部分だけクローズアップして描かれている木は、視野が狭く外界と自己の関係を的確に把握していないことが示されていると言われている（高橋・高橋，2010）。視野を広く持ち、外界と自己との関係を的確に捉えられていることにより、周囲からのサポートを認知して上手く活用できていることが、木の切断の有無に表現されていると言える。

6. 木の状態について

葉が茂っている木を描く者の方が多くの下位因子の得点が高かった。高橋・高橋（2010）は、葉は他者との関係を表すと述べている。そして、Castilla(1994/2002)は、葉のない枝を不安の主なサインのひとつとして挙げ、対人接触の困難さを示すとした。これらの指摘から、葉が茂っていることは、外界からの刺激を好み、その刺激を適切に受けとめて生かす柔軟性やエネルギーがあることを表しているのではないかと考える。そして、葉はそういった外界との交流を助ける部分でありながら、木を保護する部分でもある。茂みを描くということは、外界からの刺激を緩衝するような特性が自身に備わっていることを自認しており、むやみにストレッサーに晒されることなく、安定した精神状態であることが示唆されていると言えよう。

7. 樹冠の種類について

雲形の樹冠を描く者は、その他の樹冠の描く者より多くの下位因子において得点が高かった。成長に必要なものを受け取るなど、外界との交流を助ける部分である葉の茂みの輪郭が、丸く波打つように描かれる雲形の樹冠は、外界からの刺激を適切に受け止めて力に変えるなどと、外界と円滑に交流できることを表していることが推察される。また、葉が茂ることで木は外界へどんどん存在を広げていく。外界との交流で得たものを糧にし、自己の成長のために前向きに努力ができるという面が、個人内資源の認知尺度や個人内資源の活用尺度の多くの下位因子との関連がみられた一因ではないだろうか。

8. 樹冠の形状について

円形や縦長の樹冠を描く者は、多くの下位因子において他の形状の樹冠を描く者より得点が高かった。外界との交流を助ける部分である葉の茂みの輪郭が雲形であり、なおかつバランスのとれた円形であるということは、その対象者が外界との交流をバランスを取りながら、円滑に丁寧に行っていることが推察される。縦長の樹冠が描かれた絵の多くは、木全体が用紙に収まるように樹冠が伸ばされている。高橋・高橋(2010)は、切断された樹木画について、洞察力の不足、生活空間からの逸脱や回避などを意味していると述べていることから、縦長の樹冠に、現在の自分を取り巻く環境に対して適応しているという自認や、未来や目標に向かって積極的にエネルギーを注ぐことの出来る活動性などが表現されていることが考えられる。

9. 枝の構造について

二次元の枝を描く者は「熟慮的行動因子」の得点が高かった。高橋・高橋(2010)は、平行した二つのラインで描かれる二次元の枝は、被検者が内界と外界との精神的交流を円滑に行えると感じていることを表すと指摘しており、枝は精神的エネルギーが自己と外界を行き来する際の通路を象徴するようである。乗り越えるのが困難な場面に直面している状況であっても、自分の能力や決断を信じ、目標に対して円滑にエネルギーを注ぐことが出来るという特徴が二次元の枝として表れている可能性がある。

10. 枝の先端処理について

先が開放されている枝を描く者は「熟慮的行動因子」の得点が高かった。幹は樹木の中心となる部分である。今回の調査で先が開放された枝が描かれた木の絵にはいずれも樹冠があり、枝の先が直接外界にさらされることなく保護されている。先が開放された枝が他のサインとの関係から、探求や発見への意欲、興味の多様性、現実肯定の態度を表すこともあると述べられている(高橋・高橋, 2010) ことから、現実を肯定的に受け止め、現在の状況から好転させようと方法を探求する姿勢が、先が開放された枝として表れていることが

考えられる。

11. 幹の幅について

幹の幅が狭い木を描く者は「熟慮的行動因子」の得点が高かった。樹冠に対して著しく幅の広い幹については、自己を主張しようとし、自己本位な感傷性によって、理性よりも感情に支配されやすいことを表しがちであると述べられている(高橋・高橋, 2010)。自分が直面している問題やそれにまつわる自身の課題を受け止めた上で困難や問題を解決しようと前向きに取り組む特性、また自分自身や直面している問題について客観視し、冷静に問題解決に取り組むことができるという特性が、幅の狭い幹として表れていることが推察される。

12. 樹皮の描写について

樹皮の描写が詳細でない者は、周囲のサポートを認知しよく活用出来ていることが分かった。樹皮は、樹木の中心である幹の表面で、外界と接する部分である。周囲の人と良好な関係を築いているなど、自分を取り巻く環境に問題を感じていない場合は、周囲と自分との関係をあまり意識しないことが考えられ、それが詳細に描き込まないシンプルな表現として表れていると言えよう。

13. 根の有無について

いくつかのラインなどを重ねて根を示唆する表現をする者は、根を描かない者や根を明確に描く者より「気ばらし行動因子」の得点が低かった。傷つきや問題に直面した際に、何を行うことで気ばらしになるのが自身で把握できているのは、傷つきや問題に常にとらわれることなく、気持ちが安定するという意味では必要であると思われるが、傷つきや問題から距離を置くのは、現実からの逃避という面も否めない。自己に内在する特性を活用し、困難な場面对処したり精神を安定させたりするということが、陰影や線を用いて根を示唆するという表現に表れていることが考えられる。

14. 根元の修飾について

根元に草花を描く者は「熟慮的行動因子」の得点が高く、「家族資源因子」の得点が低いことが

分かった。高橋・高橋(2010)によると、木の根元を隠すように描かれた草花などは、自分自身の衝動を意識し、環境との妥協を図っていることが示唆されていると述べられており、自分が現在置かれている状況を受け入れた上で、困難な状況を乗り越えるためにはどうすればよいか考えることができるという特徴が、根元の修飾として表れた可能性がある。また、地面は被検者が生活している直接的環境を示し(高橋・高橋, 2010)、木の根元に描かれる草花については、観察する人(検査者)の注意を何か重要なものから注意を逸らす“おとり”であると言われている(Bolander, 1997/1999)。これらの指摘から、根元に草花などを描いてくことによって、もっとも身近で密接な人間関係と言える家族との関係に対して対象者が抱えている不適応感などを表していることが考えられる。

15. 実の有無について

ひとつの木に複数の種類の実を描く者は、家族のサポートを認知しておらず、活用も出来ていない事が分かった。高橋・高橋(2010)は、実を描くように教示していないのに果実を描く者について、描画の他のサインとの関係から幼兒的な依存欲求を表すこともあると述べている。また複数の果実が描かれた木のうちの1枚には、木の近くに昆虫が飛んでおり、この特徴は昆虫と自分を同一化して木に家庭を象徴させていることが多く、依存性や未成熟性を表す指標である(高橋・高橋, 2010)。これらの指摘や描画後の質問(以下、PDDとする)での表現から感じられる孤独感から、最も身近な他者である家族との密接な関係や依存を求める気持ちが、複数の種類の果実がなる木として表れている可能性がある。

16. 実の状態について

未熟な実を描く者は「有能感因子」の得点が高かった。未熟な実を描いた対象者のPDDでは、実が未熟であるということに、未来への期待といったようなポジティブな意味が象徴されていることが感じられたことから、努力をすればきっと目的を達成したり、よい結果を出すことができる

だろうという自分の能力への信頼が、未熟な状態の実として表れていることが考えられる。

17. 1本だけ生えている木か複数の木の中の1本かについて

複数の木の中の1本であると答えた者は「社交性因子」と「友達資源の活用因子」の得点が高かった。他者との関わりが密で相互作用を感じられるような環境の中に自身がいたり、もしくはそういった環境を望んでいることが投影されているのではないかと推察される。他者とコミュニケーションをとることを好み、他者と関係を築くことに長けていると自認していること、友人などの周囲の人と相互に作用し合い、自身がサポートを必要とするときは上手く活用できているということが、複数の木の中の1本をイメージすることに表れているのではないだろうか。

総合考察

個人内資源の認知尺度の得点の高低と環境資源の活用尺度の得点の高低に、共通して有意差や有意傾向が出ている描画特徴が多いことから、自己にストレッサーからの影響を緩衝する要因となるような特性が内在していることを認知している者は、傷つきや直面した問題を家族や友人などの周囲の人間関係を上手く活用して乗り越えることができると考えられる。また、葉の有無や葉と木の関係(樹冠の種類や形状)、樹皮の描画特徴が、Resilience尺度の4下位尺度や、それぞれの下位因子との間に多くの関連がみられたことから、葉や樹皮の描画特徴にレジリエンスが表現されやすいと言えよう。葉と樹皮両者に共通するのは、外界と自己の間の緩衝地帯であったり、保護の役割を果たすものであったりすることである。また、葉には木を保護する役割だけで無く、日光などの資源を取り入れたり、酸素を排出したりなど、外界との交流を担う部分でもあるため、葉に象徴されるイメージは、環境との相互作用も含まれていると考えられる。本研究では、レジリエンスを「ストレスの負の効果を和らげ、適応を促進させる個人の特性」(Wagnildら, 1993)と定義した。外

界からの刺激であるストレスの影響の緩衝要因となって自己を保護し、なおかつ外界との交流を担う葉と、レジリエンスの概念は似通っているのではないだろうか。

今回の調査で葉が茂っていない木の絵を描いた7名のうち4名は、Resilience 4側面尺度の4下位尺度すべてが低群に属していた。また、葉が茂っていない木の絵を描いた7名の内の6名が樹皮に過度に詳細な描写をし、前述のResilience4側面尺度の4下位尺度すべてが低群に属している4名は、全員樹皮に過度に詳細な描写があった。このように、葉が茂っていない木の絵には、樹皮に過度に詳細な描写が多いことから、葉の描画特徴と樹皮の描画特徴は何らかの関連があることが示唆された。

今後の課題として、本研究では描画特徴同士の関係は検討しなかったため、今後は描画特徴同士のつながりも視野に入れ、レジリエンスと樹木画における描画特徴との関連を詳しく検討したい。また、男女比に大きな偏りがあったため、差を検討するサンプルとしては不相当だと判断し、本研究では性差の検討を行っていない。樹木画の描画特徴やレジリエンスとの関連に男女差がある可能性も考えられるため、性差の検討も今後の課題としたい。

文献

- Bolander, K. (1977). *Assessing Personality Through Tree Drawings*. USA: Basic Books Inc. 高橋依子(訳)(1999). 樹木画によるパーソナリティの理解. ナカニシヤ出版
- Bonanno, G.A. (2004). Loss, trauma, and human resilience: Have We underestimated the human capacity to thrive after extremely adverse events?. *American Psychologist*, 59, 20-28.
- Castilla, D. (1994). *Le test de l'arbre Relation humaines et problèmes actuels*. Paris: Masson. 阿部恵一郎(訳)(2002). バウムテスト活用マニュアル 精神症状と問題行動の評価. 金剛出版
- 井俣経子・中村知靖(2008). 資源の認知と活用を考慮した Resilience の4側面を測定する4つの尺度. *パーソナリティ研究*, 17(1), 39-49.
- Luthar, S.S., Dante Cicchetti, and Brounwyn Becker (2000). The Construct of Resilience: A Critical Evolution and Guidelines for Future Work Child Development, 71, 543-562.
- 村木良孝(2015). レジリエンスの統合的理解に向けて—概念的定義と保護因子に着目して—. *東京大学大学院教育学研究科紀要*, 第55巻.
- 小花和 Wright 尚子(2002). 幼児期の心理的ストレスとレジリエンス. *日本生理人類学会誌*, 7(1), 25-32.
- Selye, H. (1956, 1976). *The Stress of Life*. New York: McGraw-Hill Book. 杉靖三郎・田多井吉之介・藤井尚治・竹宮隆(訳)(1988). *現代社会とストレス*. 法政大学出版局
- 高橋雅春・高橋依子(2010). 樹木画テスト. 北大路書房.
- Wagnild, G.M., & Young, H.M.(1993). Development and psychometric evaluation of resilience scale. *Journal of Nursing Measurement*, 1, 165-178.